

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 4月26日現在

機関番号：12401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530693

研究課題名（和文） 子どもの道徳的自律タイプの発達と心理的適応との関連

研究課題名（英文） Relations of moral autonomy types to psychological adaptations in Japanese adolescents

研究代表者

首藤 敏元（SHUTO TOSHIMOTO）

埼玉大学・教育学部・教授

研究者番号：30187504

研究成果の概要（和文）：

本研究は、道徳的自律の型が青年期にどのように出現し、どのように変容するのかに焦点を当て、それらと親子葛藤の質、自己発達および精神的健康との関係を検討した。中学生から大学生までの計1091名を対象にした5つの調査から、領域を越えて自由裁量権を主張する「自由感肥大型」の青年の適応がもっとも不全であることが共通して認められた。この道徳的退行現象の結果を包含する新しい青年期の道徳的自律の発達モデルが作成された。

研究成果の概要（英文）：

This research examined the relationships between development of moral autonomy and psychological adaptation in Japanese adolescents. Especially, it was focused how moral autonomy types appears and changes in adolescence. And relations of their types to quality of parent-child conflicts, self-development, and psychological health were analyzed. Five studies total 1091 adolescents, from junior high school students to undergraduate students, participated were conducted. As a result, it was found out in common that adaptation of the "over discretion type" adolescents who asserts the right of discretion across domains were the most insufficient. This result is contrary with the result of traditional adolescence research which suggested that parents over control weakened adaptation of adolescence. Rather, this result is parallel with adolescents' moral regression in Kohlberg theory. Based on these results, the model of the development of moral autonomy in adolescence was considered.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学、教育心理学

キーワード：道徳発達、親子葛藤、自己決定、自律、青年期、個人差、精神的健康

1. 研究開始当初の背景

道徳性が社会的相互作用の中で発達することは認知的発達理論と社会文化的理論に共通する基本仮説である。特に、他者との葛藤は、自他の視点の差違とその解決が求められるため道徳的自律の主要な土壌となる。

他者との葛藤は領域調整の場として機能する。中でも、親子葛藤は子どもの慣習領域の発達にとって重要である(首藤・二宮, 2003)。青年は、親の権限が青年の個人的好み、外見や友人関係の場面には及ばないこと、親はこれらの場面にも権威を発揮しようとする、その結果が親子葛藤に発展することが見出されてきた(首藤, 2012)。親子葛藤の程度は問題となる場面の性質によって異なり、青年が個人領域から判断し親が慣習領域から判断する場面でもっと大きい。このような親子の葛藤という社会的相互作用の中で、青年の個人裁量権や自己決定権という自律の発達と、状況に応じた権威の受容という社会道徳的な発達が達成されるといえる。

親の権限が子どもの個人的な問題にまで及び、子どもがその権威を受容せざるを得ないとき、子どもの自己発達はどのような影響をうけるのだろうか。逆に、青年の自由感が慣習領域に及び、親がそれに従わざるを得ないとき、青年の自己は発達するのだろうか。

2. 研究の目的

- (1) 本研究は、心理的離乳が求められる青年期に焦点をあて、親子葛藤から青年期の道徳的自律をとらえる。
- (2) 青年期の道徳的自律のタイプが青年期から後期にかけてどのように変容するのかについて、横断的方法により明らかにする。
- (3) 道徳的自律のタイプと青年期の自己発達、および精神的健康との関連について分析し、青年期の自律について新しいモデルを構築する。

3. 研究の方法

- (1) 中学生と高校生の道徳的自律と自己形成
調査協力者 愛知県内の公立中学校に在籍する12歳から15歳(平均14歳)までの生徒243名(男子117名, 女子126名)、埼玉県と東京都内の高校に在籍する16歳から18歳(平均16歳6ヶ月)までの生徒408名(男子217名, 女子191名)、合計651名が調査に協力した。質問項目 社会道徳的場面—行儀、小遣い、防犯、整理整頓、友人関係、健康管理、ネット利用、髪型、趣味嗜好、勉強などに関する28項目を作成した。協力者は各項目について、<理想とする決め方>と<実際の決め方>をそれぞれ5段階で回答した。子どもの自己決定権意識が強い選択から順に5~1として得点化した。自尊感情—

Rosenbergによって作成された尺度の日本語版(桜井, 2000)の10項目を用いた(5件法)。道徳的指向性—「用心深く生きる、自分を大切にす、自分を高める、したたかに生きる」という意味での「自愛の思慮」を軸に青年の道徳観を測定する尺度(首藤, 2003)を用いた。原尺度は「向上的自愛」「道徳的無力感」「保身の自愛」の3下位尺度25項目から構成される(5件法)。手続き 質問票は授業の中で配付、実施され、2週間後に回収された。回答は無記名。倫理上の配慮として、回答は自由であること、個別の回答内容を学校に報告しないことを強調した。

(2) 大学生の道徳的自律と精神的健康

調査協力者 首都圏の大学に在籍する学生195名(女子89名, 男子106名)とその保護者が調査に協力した。すべてのデータのそろった148組が分析の対象になった。平均年齢は20歳、全員が自宅生であった。調査項目 道徳的自律—反社会、礼儀作法、健康管理、趣味・嗜好、友達関係、身体・外見、勉強・進路の7場面、場面ごとに3項目、合計21種類の社会道徳的行為が描かれた。行為ごとに4種類の質問が用意された。質問1: 子どもの自己決定性[4段階]、質問2: 親権威の正当性[4段階]、質問3: 親の権限の受容/自己決定(大学生と親との意見が合わないとき、最後はどうするのがよいか)[2段階]、質問4: 親介入の予期(あなたの親はどのようなかわり方をすると思うか)[4段階]。心理的健康—UPI (University Personality Inventory) の60項目が用いられた。手続き 質問票は授業を通して配布され1週間後に回収された。調査は無記名。UPIの回答に際し、診断検査ではないこと、回答結果から学生を呼び出すことはしないこと、相談があるときは保健管理センターで対応すること、申し出があれば調査実施者が仲介できることが強調された。

(3) 大学生の親子葛藤と道徳的自律

調査協力者 埼玉県と東京都の大学に通う大学1年生から4年生の親子、合計280名が調査に協力した。道徳的自律タイプは(1)と同様に、社会道徳的葛藤場面での「子どもの自由裁量権判断」「親権威の正当性判断」「理想とする解決方法」の質問から測定した。大学生の精神的健康の測定にはGHQ-28検査を用いた。

4. 研究成果

- (1) 中学生の道徳的自律と自己形成
自由裁量判断 <理想>の決め方と<実際>の決め方別に、28項目の自由裁量判断得点を因子分析(最尤法—斜交回転)にかけた結果、どちらも同様の3因子を抽出することができた。因子パターンと項目内容に基づき、因子1: 個人自由, 因子2: 自己管理, 因子

3：親権威と命名した。尺度得点（1～5点）を求め、因子ごとに2（性）×2（理想－実際）のANOVAを行った。その結果、すべての因子で男女を問わず、自由裁量判断は、理想＞実際（ $p<.01$ ）となった。また「親権威」場面において性差が有意になり、男子の方が自由裁量判断が強かった（ $p<.01$ ）。

自由裁量判断と自尊感情、道徳的指向性との関連 <理想>と<実際>別に、性と3因子別の自由裁量判断得点を説明変数とする重回帰分析を実施した。すると、<理想>と<実際>の両方において、「親権威」場面での自由裁量判断が強いほど、自尊感情が高くなることが分かった（いずれも $p<.05$ ）。また、「自己管理」場面での自由裁量判断が強いと、「道徳的無力感」が高くなり（理想と実際、 $p<.01$ ）、「向上的自愛」が低くなる（実際のみ、 $p<.05$ ）関係が認められた。「個人自由」場面での実際の自由裁量判断が高いと「向上的自愛」も高くなる関係も認められた（ $p<.05$ ）。

中学生においては、親の権限の強い場面であっても、自己決定権を發揮することが自尊感情を高めることが示された。将来的には、対象を高校生と大学生まで広げ、道徳的自律の発達を自己形成の観点から検討を加えると同時に、その発達の文脈としての親子葛藤について親子の相互影響性を考慮に入れた分析が必要となるだろう。

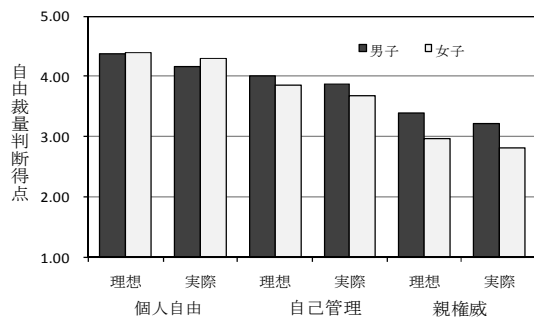


Figure1 場面別の自由裁量判断得点

(2) 高校生の道徳的自律と自己形成

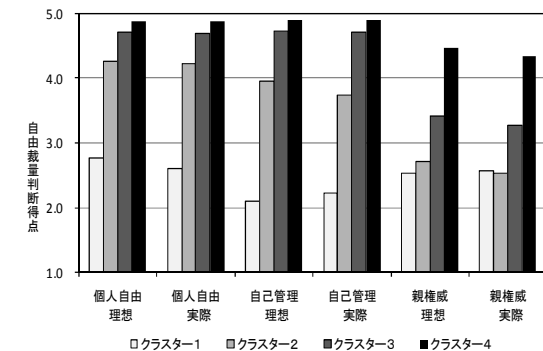
自由裁量判断 <理想>の決め方と<実際>の決め方別に、28項目の自由裁量判断得点を因子分析（最尤法－斜交回転）にかけた結果、中学生と同様の3因子を抽出することができた。因子パターンと項目内容に基づき、因子1：個人自由、因子2：自己管理、因子3：親権威と命名した。尺度得点（1～5点）を求め、因子ごとに2（性）×2（理想－実際）のANOVAを行った。その結果、親権威因子のみで、自由裁量判断は、理想＞実際（ $p<.01$ ）となった。性差は有意でなかった。

自由裁量判断のパターン 6つの尺度得点に関して、K-means法によるクラスター分析を実施した。その結果、4つのクラスターが見出された。第1クラスターは、場面に関係な

く、自由裁量判断が顕著に低いため、「抑制型」と命名した。自由裁量判断が個人自由場面では高く、自己管理場面では中程度、親権威場面では「抑制型」と同程度に低いクラスター2は「規律型」、親権威場面のみで低いクラスター3は「個人自由型」、親権威場面でも高いクラスター4は「自由奔放型」と命名した。

自由裁量判断と自尊感情、道徳的指向性との関連 2（性）×4（クラスター）のANOVAの結果、自尊感情に関しては有意な効果は認められなかった。道徳的指向性の向上的自愛（ $F_{(3,344)}=3.19, p<.05$ ）と無力感（ $F_{(3,345)}=6.13, p<.01$ ）に関して、クラスターの主効果が有意になった。多重比較の結果、向上的自愛は自由奔放型<規律型・自由型、無力感は自由奔放型>自由型・規律型・抑制型となった。

本研究の社会道徳的場面には道徳領域の要素を持つものはなかった。分析の結果、個人自由（個人領域）、自己管理（多面的）と親権威（慣習領域）に相当する因子が認められたことは社会的領域理論の知見とも一致する。全体的に自由裁量判断傾向の高い中で、親権威場面においても自由感を發揮しようとする奔放型が他のタイプと比べて道徳的な自己形成の面で混乱を呈している状態が示唆された。しかしながら、自尊感情との関連は認められなかった。今後は、道徳的自律の発達を自己形成の観点から検討を加えると同時に、その発達の文脈としての親子葛藤について親子の相互影響性を考慮に入れた分析が必要となるだろう。



(3) 大学生の道徳的自律と自己形成

道徳的自律のパターン 親子葛藤場面での「親の権限の受容／自己決定」に関して、自分の意志優先の自己決定をする判断を1点とし、7場面ごとの合計得点が算出された。この標準化得点についてK-means法によるクラスター分析が実施された。その結果、3つのクラスターが見出された。第1クラスターは、身体外見と趣味嗜好の場面での親権威を認めないクラスターであり、「規律型」と命名された。第2クラスターは、反社会的場面と礼儀作法場面では親権威を強く認め、身体管

理場面でもある程度それを認めるものの、身体外見、趣味嗜好、勉強進路、友達関係の場面では強く自己決定を発揮するのが特徴であり、「自由型」と命名された。第3クラスターは、反社会的場面では親権威を認めるものの、その他の場面ではそれを認めないのが特徴であり、「自由感肥大型」と命名された。

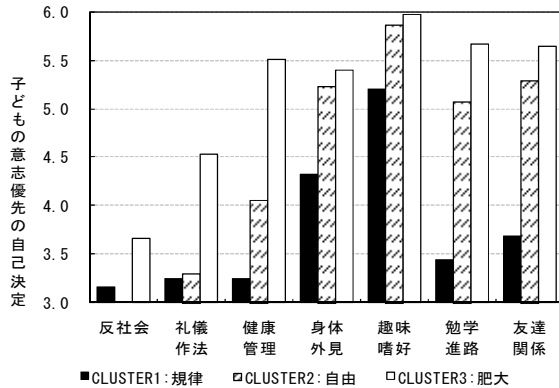


Figure 1 各クラスターの自己決定得点の平均
道徳的自律のパターンとUPIとの関連 60項目のUPI尺度から全般的不適応、健康度、不健康度、不安障害、抑うつ等の得点が算出され、クラスターを要因とする分散分析が実施された。その結果、クラスターの主効果はどれも有意には達しなかった。次に、UPIの呼出基準に基づき、基準に該当する学生(呼出群)と非該当の学生(通常群)とが区別された。そしてクラスターとのクロス表が作成された。その結果、通常群では自由型の学生が顕著であり、呼出群では肥大型の学生が多かった ($\chi^2_{(2)}=7.74, p<.05$)。

Table 1 クラスターとUPIとの関連

		規律型	自由型	肥大型	
UPI 呼出基準	通常群	19 15.20%	72 57.60%	34 27.20%	125
	呼出群	6 26.09%	6 26.09%	11 47.83%	23
合計		25	78	45	148

(4)大学生の親子の親子葛藤と道徳的自律
因子分析とクラスター分析の結果、大学生から見た地震の道徳的自律タイプは「統制不全型(自由奔放型)」「抑制自律型」「過剰抑制型」の3つに大別できることが分かった。親から見た大学生のタイプ根ほぼ同様の方に分けることができた。GHQからとらえた精神的健康は「統制不全型」がもっとも悪く、「抑制自律型」と「過剰抑制型」の間には有意差は認められなかった。また、「統制不全型」は親子コミュニケーションでの応答性は低く、親子葛藤における「嘘とごまかし」も多いことが分かった。「統制不全型」の親は親子葛藤において「あきらめる」事が多いこともわかった。これらの結果は、過剰抑制が青年期の適応を弱めることを示唆した今までの青年心理学研究の結果とは反する。(1)

～(3)において認められたように、青年期前期での「抑制型」と後期での「統制不全型」が発達的に連続していることが推察される。かつてのKohlberg理論における段階2.5が青年期に認められるという結果との連続性について考察し、道徳的自律と自己形成、及び精神的健康との関係についてモデルを検討した。

青年は親と葛藤するだけでなく、自己開示をすることも多い。しかし、開示する内容は領域に依存し、個人領域のものが多く、その領域の話題に関しては、青年は親に嘘をつくことは少ない(首藤, 2012)。慣習違反や道徳的逸脱に関する話題は持ち出さないということは、自己開示する内容を青年が自己決定し、親の理解する青年の私生活を青年自身がマネジメントするということである。この点は、今後の研究の展開につなげる必要がある。親のしつけが子どもの逸脱行動の内容と文脈に適切であると認知する青年は、高い向社会的価値を有することも見出されている。親の場面の性質に適した統制や放任は、青年の自律を促し、精神的健康を支える経験になると考えられる。一方、親の場面の性質を考慮しない「権威の放棄」と「過剰統制」が子どもの自律を不安定にすると考えることができる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① 首藤敏元・エリグナ(2013). Kindergarten children's and teachers' cognitions of 'Mottainai' and their socio-moral judgments about environmental deviancy. *Journal of Saitama University, Faculty of Education*, 62(1), 25-36. [査読なし]
- ② 首藤敏元(2012). 規範意識を培う指導「初等教育資料」, No. 892(NOV. 2012), 86-89. [査読なし]
- ③ 首藤敏元(2011). 共感と向社会的行動「児童心理学の進歩 2011年版」(平木典子・稲垣加世子・斉藤こずゑ・高橋恵子・氏家達夫・湯川良三編), 金子書房, 102-125. [査読あり]
- ④ 首藤敏元(2010). 子どもの情操を育てる「日本教育」(社団法人 日本教育会), 第390号, 6-9頁[査読なし]
- ⑤ 首藤敏元(2010). 共感性の発達と乱暴な言葉「児童心理」(金子書房), 64, 907-912頁[査読あり]

[学会発表] (計13件)

- ① 大山智子・登張真穂・首藤敏元・名尾典子・木村あやの(2013). 協調性が対人交渉方略に及ぼす影響 日本発達心理学会

- 第 24 回大会発表論文集, 418 頁
[2013. 3. 16 明治学院大学]
- ② 登張真稲・大山智子・首藤敏元・名尾典子・木村あやの(2013). 大学生の所属サークルと協調性との関係 日本発達心理学会第 24 回大会発表論文集, 417 頁 [2013. 3. 16 明治学院大学]
- ③ 名尾典子・登張真稲・大山智子・首藤敏元・木村あやの(2013). 協調性と内的作業モデルとの関連 日本発達心理学会第 24 回大会発表論文集, 416 頁 [2013. 3. 16 明治学院大学]
- ④ 登張真稲・大山智子・首藤敏元・名尾典子・木村あやの(2012). 協調性と攻撃性, 感情欲求抑制および印象操作との関係 教育心理学会第 54 回総会発表論文集, PF017 [2012. 11. 24 琉球大学]
- ⑤ 大山智子・登張真稲・首藤敏元・名尾典子・木村あやの(2012). 協調性と仲間関係との関連 日本教育心理学会第 54 回総会発表論文集, PC028 [2012. 11. 24 琉球大学]
- ⑥ 登張真稲・大山智子・首藤敏元・木村あやの・名尾典子(2012). 協調性度の妥当性の検討 日本パーソナリティ心理学会第 21 回大会発表論文集, 52 頁 [2012. 10. 6 島根県民会館]
- ⑦ 登張真稲・大山智子・首藤敏元・木村あやの・名尾典子(2012). 協調性尺度の開発 日本心理学会第 76 回大会発表論文集, 23 頁 [2012. 9. 12 専修大学]
- ⑧ Shuto, T., and Eriguna (2012). Cognition of "Mottainai" in Kindergarten Teachers and Young Children and their Socio-moral Judgments about Environmentally Deviant Behaviors. The 13th annual conference of Pacific Early Childhood Education Research Association (PECERA), Singapore. [2012. 7. 22 Nanyang Technological University, Singapore] [査読あり]
- ⑨ 大山智子・登張真稲・首藤敏元(2012). 大学生における対人交渉方略と特性共感の関連 日本発達心理学会第 23 回大会発表論文集, 579. [2012. 3. 11 名古屋国際会議場]
- ⑩ 首藤敏元 (2012). 青年期における個人及び慣習場面での自由裁量判断 日本発達心理学会第 23 回大会発表論文集, 501. [2012. 3. 10 名古屋国際会議場]
- ⑪ 首藤敏元 (2011). 高校生における社会的道徳的場面での自由裁量判断と道徳的自律 日本心理学会第 75 回大会発表論文集, 983. [2011. 9. 15 日本大学文理学部]
- ⑫ 首藤敏元 (2011). 中学生における社会的道徳的場面での自由裁量判断と道徳的自

律 日本教育心理学会第 53 回総会発表論文集, 183. [2011. 7. 25 札幌道民活動センター かでる]

- ⑬ Shuto, T., and Ninomiya, K. (2010). Conceptions of Personal Autonomy in Family Relationships in Japan. The 118th annual convention of American Psychology Association, San Diego, CA. [2010. 8. 15 Conventioncenter, San Diego, CA] [査読あり]

[図書] (計 2 件)

- ① 首藤敏元(2012). 社会的基準・ルールの理解と道徳性「発達科学ハンドブック 5 社会・文化に生きる人間」(日本発達心理学会編/氏家達夫・遠藤俊彦責任編集), 新曜社, 160-169.
- ② 首藤敏元(2010). 幼児・児童の共感的反応「社会化の心理学ハンドブック」(菊池章夫・二宮克美・堀毛一也・斎藤耕二編), 川島書店, 293-311 頁

[産業財産権]

- 出願状況 (計 0 件)
○取得状況 (計 0 件)

[その他]

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

首藤敏元 (SHUTO TOSHIMOTO)
埼玉大学・教育学部・教授
研究者番号: 30187504

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし